



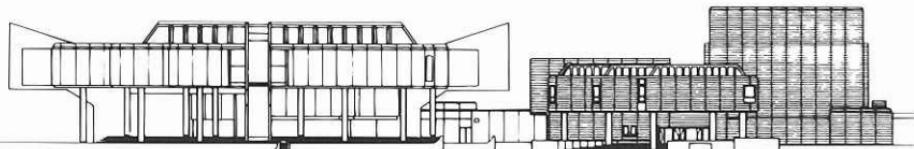
白仏の仏(田原輝作) 1971(昭和46)年

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

28 November 1997

No. 118



講演会要旨

「田原先生を偲び 芸術と人生を考える」

元佐賀大学教授 深川善次氏

私ごときものが、先生の高いたかい芸術信条をお話したり、また、ものすごく深い先生の美術家としてのお姿をお話することはとうていできませんけれども、先生を少し知るものとして、在りし日の面影をエピソードを交えてお話ししたいと思います。

私は昭和22年から26年の3月まで先生のお宅に下宿しました。そのときお世話になりました御遺族が来ていらっしゃっています。田原洋三様、その当時の幼稚園から小学校に通っていた紅子ちゃん、その御主人吉草様です。なお、ここで御紹介させていただきますと、すでに故人となられました御二人がございます。長男の方が田原昭様、次男の方が田原早苗様です。ともに海軍兵学校在学中に終戦となり、その後、それぞれ薬学、農学の分野で大きな功績を残されました。

そんなすばらしい方がいらした先生のお宅で、一緒に勉強をさせていただいたことを感謝いたしております。

まずお話ししたいのは、ここに飾っております2枚の作品についてです。私のアトリエの正面に掲げております『大日如来』。その隣の作品が、睡蓮を描かれたもので、キャンバスを持たなかつた私に、この上に描いてよいと言われていただいた作品です。この2点が私の守り神として置いておる作品です。その他に、これは桐箱に入った2百通もの手紙、この手紙を読み返してみると吉田松陰先生を思い出します。松陰先生の、つねに学生に対しては1対1で敬意を払つて一緒に勉強する姿勢を、田原先生のお手紙に感じます。

つぎに先生の書です。『宿昔青雲志、跋距白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐。』と書いてあります。これを見て、「吾れ東都に画を学ぶ、未だその志成し得ず」という、先生が若いときの実家の襖の落書きを思い出します。芸術、學問の世界に志す人の気持ちをお書きになつたものとして大事にとつております。それからこれは田原先生の遺影です。それに田原先生の麦藁帽。それにもうひとつ私のアトリエに置いてあるのが私の母の遺影です。この母が先生を

紹介してくれたんです。そのことを少し話します。

人生とは何ぞや、ということを考えたときに、一人ひとり人生観があるわけですが、ひとつ言えることは、出会いと感動の歴史、これが人生ではないかと思っています。その出会いと言つたら人との出会いがあります。時代との出会い、大自然との出会い、小さいトンボとの出会いもありましょう。その出会いのなかで自分とということをどのように生かしていくか。その感動を生かしていくのが人生ではないだろうか。こう考えたときに、先生との出会いをしてくれたのが私の母でした。

私の家は百姓をしており、農耕馬を一頭飼っていました。その名前をいづみ号と言いました。小学校のときの私の仕事はいづみ号の世話をすることでした。その馬が余所に売されることになりました。そのときの売られていく馬の後姿を見た感動が馬を描くきっかけとなつたのです。それが田原先生との出会いのきっかけとなつたのですね。母が馬の絵ばかりを描く私の姿を見て、絵描きになるならと、田原先生を紹介してくれました。さっそく出掛けた田原先生のアトリエには、墨で描かれた真っ黒い牛の絵が掛けられていました。そうしたとき先生が大詫間になつてこられました。そのとき馬の絵を描きました。小学校4年生の頃です。そのときの褒められた心を持つて、私は将来絵の先生になることを決めたのです。

佐賀師範に入ったときまた大詫間のアトリエにいつて牛の絵をみました。そこにはあつたのが「吾れ東都に画を学ぶ、未だその志成し得ず」の先生のいたずら書だったのです。それを見てものすごく感動し、画家となる決心をしたのです。

ではスライドをします。

- 田原先生のお写真です。はじめて個展をされた頃の70歳頃のお顔です。
- 22歳頃の田原先生の自画像です。太平洋画会で勉強されていたころの作品です
- 奥様です。奥様は先生が使われていた絵の具をすべて御存じで、奥様が絵の具を買いにいってらつ

- しやいました。
- 私の絵です。馬の絵を描いているときが一番樂しいときです。これはいすみ号です。名馬となつたいすみ号です。
  - 昭和14年海洋美術展で海軍大臣賞を受賞した作品で、その当時、戦争の絵が多かつたが、この作品は漁夫の普通の生活を描いています。千葉県房総の海を描いています。海軍大臣が戦争反対者の米内光政であり、この作品をアトリエに最後まで飾つてあつたのも、その辺のやすらぎがあつたのではないかと思います。
  - 戦争時代の作品です。学生たちが汗みどろになつて働く姿です。
  - 太平洋戦争名画集に掲載されている先生の名作です。『守れ大空』です。次男の早苗さんを描いています。
  - これは学徒出陣の絵画の学生がつくった彫刻です。南方に出ていく途中に流れ木でつくった不動明王です。高校生の方もお見えですが、ぜひ『きけわだつみの声』を読んでください。
  - 大学生が出征する写真です。これは日達原でとつた写真です。日達原から知覧へそして沖縄へ特攻で出撃していくのです。
  - この絵は新潟県で描かれた作品です。私はこの絵をヒントにして農家の絵を描くようになりました。バックを明るくして手前を暗くし、生活感をだそうとしました。題材となる農家を探しまわり最後に川上の実相院をみいたしたのです。
  - 『吽』です。東大寺南大門の仏像を描いておつたときに、「田原先生」と呼ぶ人がおつた。成壇院の住職でした。その人が先生の小学校時代の教え子さんだったのです。この作品はどうしても描けなくて一度消して一気に描いたのが日展の特選となつたのです。
  - 第2回特選の『不空図索觀音』です。手紙に「もう二度とこんな作品はできないだろう。描いた、描いた、ほんとに描いた。どうすることもできないままで描いた。思い出の作品だよ」とあります。
  - 昭和35年頃の写真です。大学の設置に携わつておられ、佐賀にいらつしやつたときの写真です。
  - 先生が叙勲を受けられたときのお写真です。このときには佐賀で初めての個展を開催された。同郷で仲良しの池田知事が挨拶文を書かれ、小品20点を展示した。絵は1点を除き売りました。その1点はシクラメンの絵でした。個展をされたときにお聞きした心情えは、教員は子供のために絵を描くんだ。教員は絵は売つてはいけない、ということでした。
  - 『鶴殿の不動』この顔は小糸先生のお顔にそっくりです。
  - 『白杵の仏』です。何枚ものスケッチをされて、これだったら皆さんに差し上げてもいいと思われた作品です。
  - 白杵の三尊を前にして、なぜ石仏を描くのかと問われ、白杵の大自然の中に存するこの仏さまの雄大さと偉大さとそして歴史を感じる姿に魅せられて、そこに心象性を表わす、と。
  - 絶筆となった作品を前に立てて、イーゼル、パレットなどこれらはすべて手製です。筆には竹を巻き付け、キャンバスと目を遠くにして描いておられました。
  - これが絶筆です。もちろんサインもありません。三尊仏です。どこのほとけ様かわかりません。先生の心を表現した作品としては最高の絵だと思います。
- 「宿昔青雲志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐。」懸命に自分の課題に向かって勉強しておつた、ふと鏡を見たら白髪があつたという、これと同じ心持ちをもつた「吾れ東都に画を学ぶ、未だその志成し得ず」を見ながら、こうした先生の気持ちを察したときになにか人生を考えさせるものを感じます。
- こんなすばらしい自分の名を売らず、懸命に自分の道を歩いた大先輩が佐賀の地におつたということをぜひ心にとめていただければ有り難いと思います。
- 本要旨は、企画展『洋画家田原輝－ジョルジュ・ルオーへの道』の記念講演会の録音から纏めました。
- (文責 企画普及係長 松本誠一)

## 研究ノート

## 佐賀における木綿について

はじめに

佐賀では主に有明海の干拓地で古くから棉が栽培されていたという。有明海は広大な干潟を有し、豊富な魚介類をはじめとして、多くの自然の恵みを人々にもたらした。そして佐賀では積極的に有明海の干拓事業を行ない耕地を増やしてきた。しかし、この干拓地での棉栽培についてはほとんど知られていないのが現状であろう。

また、佐賀においては鍋島更紗、鍋島綾通など本綿を素材にした染織品が多く作られたことがよく知られている。「鍋島更紗秘伝書」によると、鍋島更紗は文祿・慶長の役のうち、朝鮮半島から渡来した九山道清によって創始せられたと伝える。また鍋島綾通は元禄年間に古賀清右衛門から習い、織り始めたとされる。ともに佐賀藩ではこれらを御用品として保護し、明治以降も盛んに作られた。鍋島更紗は大正頃に途絶えたが、鍋島綾通は現在でも織られている。

ここでは鍋島更紗、鍋島綾通などの素材として、江戸時代に非常にポピュラーであったと思われる佐賀の木綿について考察するものである。

### 1. 佐賀における棉（木綿）の栽培

佐賀での棉栽培の実態を知る史料はほとんど無く、その全体を把握することは難しい。しかし、新しく拓かれた干拓地は塩分が多く稻作には向かない。それで稻作ができるまで間、棉が栽培されたという。「佐賀県農業史」（昭和42年）のなかでも藩政期の殖産興業を記した項に、「棉は主として干拓地に植えられた。これは干拓地に適していたので干拓地の汐留ができると、米より早く棉が作られた。これが三、四年栽培されている間に除塩が進行し、始めて稻が植えられる」として干拓地の除塩作物として棉が栽培されたことが記されている。

そもそも日本の木綿栽培は三河国からはじまっている。これは「類聚国史」（1552年）に、延暦18年（799）に「蜜船」が三河に漂着して綿種を伝え、翌年、朝廷はその種子を紀伊などの国々に配り、試植させたという記述によるもので、それが三河発祥説の根拠となり、その後、日本各地に広まったという。

このことについては永原慶二氏の『新・木綿以前のこと』（1990年）に詳しく述べられている。

永原氏は九州における木綿にも注目する。前掲書によると、天文16年（1547）に筑後の国人領主田尻親種が君主と仰ぐ豊後の大友義鑑に参府したが、そのときの「參府日記」の中に主君やその関係者に大量の「木綿」「崎織」「崎木綿」を贈つており、木綿だけでも百数十反におよんだという。永原氏は、この「崎織」「崎木綿」が中国産ではなく国内産と見た方が自然だといい、さらに、天正12年（1584）の島津氏の家臣の日記における薩摩の木綿についても国内産と考えてよいのではないかとしている。そしてむしろ日本の木綿栽培は九州からはじまつたのではないかと推定している。

佐賀における木綿栽培については、「佐賀県干拓史」（昭和16年）でも触れられているが、江戸後期から明治頃の様子を記したもので、いつごろからはじまつたのかは明らかではない。ともかく、それによると「六府方の新地及び川副の新地には、草棉を耕種して、近村に紡績を勤めしめ、以て、白石郷・犬井童木綿と称して、博く藩内に沾らるゝ名産物となり、次で西洋に棉花紡績の業盛に興るにつれて、此の産物は國を富ます、重要品の一に數へられるに至つた」という。

佐賀の干拓事業は慶長年間以降、盛んに行なわれるようになるので、おそらく木綿栽培もそれにともなって行なわれ始めた可能性はあろうが、それを示す史料は無い。そして干拓地での木綿栽培は前述したように除塩を主な目的としたので、暫定的な栽培にとどまつたようである。前掲の「佐賀県農業史」にも「商品作物として有利であるはずの棉作が稻作を超えることができないのは、（中略）保守的米作中心主義が強く影響しているのだろう」といい、さらには「安政4年（1856）年川副郷20か村の中で、木綿を作るのは大詫問、犬井道、田中の3か村、合計67町であるが、そのうち大詫問村では東永久、中永久、西永久、中新堀、東新堀5か所で2町、犬井道村御新地方新堀20町、田中村御新地方30町、合計52町に達している。残りもいずれも島方（島地）であつて、

本田富ではない。このように佐賀藩のばあい棉は重要な意義をもち得なかつた」と結論づけている。

## 2. 佐賀における木綿製品

鍋島綾通が将軍家などへ毎年、月ごとに献上する月次獻上物とされたことは、先の館報 No.111「[鍋島綾通と中国綾通]」で紹介した。その中でも触れたが、この月次獻上物については前山博氏のすぐれた研究「鍋島藩御用陶器の獻上・贈与について」(1992年)が知られている。前山氏は將軍家などへの獻上品が藩主の年譜に出てくるのは四代藩主吉茂公の「吉茂公譜」享保11年(1726)4月が最初であるが、それ以前から同様の獻上が行なわれていたとし、それが三代藩主綱茂公さらに二代藩主光茂公のころまで溯源されるかどうかは今後の課題であるといふ。

したがつて鍋島綾通は獻上されたことがはつきりしている享保年頃には十分に安定した生産が行なわれていたと思われ、また素材の木綿も他の産地のものを用いたと考えるより、佐賀で栽培されたものを用いたと考えた方が妥当ではないか。さらに推測すると、佐賀において鍋島更紗や鍋島綾通などの木綿製品が盛んに作られるが、その創始こそ朝鮮半島や中国の技術導入によるものであるが、その背景には早い時期から佐賀において木綿栽培が行なわれ、素材としての木綿が十分に供給できる体制が出来ていたからに他ならないのではないか。ちなみに鍋島更紗は「半兵衛更紗」とも呼ばれ、八代藩主治茂公の「泰国院様御年譜地取」明和7年(1770)9月の条にこの「半兵衛更紗」の名を見ることが出来る。

## 3. 明治以降の佐賀の棉栽培

「佐賀県農業史」に明治24年から43年までの佐賀県の棉の生産高が記載されている。明治24年から35年まではある程度、生産を維持しているが、明治36年以降、急激に減少する。

明治35までの間で最高の生産高を示したのは明治34年の446,411斤(約267.8t)で、最低は明治26年の30,984貫(約112.2t)である。ところで江戸後期の棉作研究書「綿圃要務」(1833年)によれば、1反(約92m<sup>2</sup>)当り、実綿50貫(約187.5kg)の収穫が見込めたという。収量は地域差やその年の天候などに左右されようが、仮にこの数字を当てはめてみると、明治34年の446,411斤の生産高は1,428.5反(14285町)

の土地から得られたものと考えられる。また明治26年の30,984貫は619.7反(619.7町)となる。先に述べたように、安政4年に川副郷で棉を栽培していた土地が47町であるので、最も生産高が多かつた明治34年で川副郷の棉栽培面積の約2倍強で、最低の明治26年で川副郷の棉栽培面積よりいくらくか少ない程度である。

そして明治36年以降は明治26年の生産高よりも少くなり、明治39年には13,623貫(約67.8t)で、最低を記録する。この急激な減少について、同じく「佐賀県農業史」によると「棉は印度棉の大量輸入によって、明治20年以降衰退作物となり、同29年綿花輸入税の撤廃されるにいたって商業的な綿作としては亡びることになった。たまたま残存している場合は、災害対抗的か自給的な意味をもつものにすぎなかつた」といい、また「郡別にみると、(中略)棉は東松浦を主とし、西松浦、杵島、小城で若干栽培せられた程度で、これまた佐賀、神埼、三養基ではほとんど姿をみせなかつた」としている。この頃には、県全体での生産高の減少とともに、有明干拓地での棉栽培もほとんど無くなつてしまつたと考えられる。

鍋島綾通は明治以降、御用品の禁を解かれ、民間で盛んに作られるようになる。しかし、明治末から大正頃になると、これまで手紡糸を使用していたのが、紡績糸を使用したものが多くなつてくる。これも佐賀における棉栽培の衰退が関係しているのではないかろうか。

## おわりに

江戸時代の有明干拓地での木綿栽培の事実は、現在ではほとんど忘れられている。木綿栽培が稻作ができるまでの暫定的なものであつたにせよ、鍋島更紗、鍋島綾通などの質の高い染織品が作られたことは意義深いことである。有明海がもたらした恵みは、単に自然環境や漁業面だけでなく、このようなすぐれた工芸品をも生み出したことを忘れてはいけない。

(学芸員 宇治 章)

## エッセイ

## 紅の仏 —ペールをぬいた平安の古仏—

ことしの一月から三月にかけて開催した展覧会「佐賀の信仰と美術」にはじめて出品された阿弥陀如来の古い仏像が注目をあつめた。展覧会の余録として、出品にいたるまでの経緯を記しておきたい。

その仏像が安置されていた佐賀県北部の山岳地帯にある七山村東木浦地区のお堂を訪れたのは平成四年七月であった。当館は、この年から県内の神社や寺院につたわる文化財の調査をはじめていた。この日は七山村のお寺をめぐっていたが、予定していた分をはやく終えたので、案内役の村の教育委員会の方に尋ねると、東木浦のお堂に仏像があるという。まったくの予定外であったが車で山道をしばらくのぼり、道沿いの民家風の建物に着いた。二階は公民館として利用され、一階が開放放たれていて、その一角がお堂として利用されていた。

金色に塗られた三尊仏が安置されていたが、中尊の阿弥陀如来像と脇侍の觀音・勢至菩薩像とはあきらかに制作年代がことなっているようにみえた。觀音・勢至像はクスノキの一本から彫りだした室町時代の仏像のようで、この判断をくだすのはそう難しいことではなかった。まよったのは阿弥陀如来像についてである。像高54センチの一本造りの仏像。後世の修理によって上状のものが厚く表面をおおつて印象を曖昧にしているが、はちきれんばかりに充実した肉体の、ぶ厚い胸板、おげさなほどに後ろに反った姿勢、左脇や膝にあらわれた渦巻き状の衣文や上腕のねじれた衣文は、まさに平安時代前期の仏像の様式的特徴をあらわしているからである。しかし、それにふさわしい鋭い彫り口や森厳な表情などの優れた表現は、厚い土の上からはみてとることができない。古い仏像を、のちに模造したことも考えられる。結論の出ないまま、後日の本格調査を約束して帰路についた。

同じ年の九月に第二次調査をおこなつたが、参加した彫刻史の研究者の意見も、前回の私見と同

じく、現状では決定的な判断はくだせないということであった。平成八年三月に発行した調査報告書に掲載した写真もこのときのもので、研究者のあいだでもとくに話題にはならなかつたようである。

この仏像が安置されていたのは道端の無人のお堂で盗難のおそれがあつたため、当館に預かることになった。平成五年十月のことである。くわえて、所有者である東木浦地区の英断により、再修理が決定した。拙劣な修理のペールによって剥われていた本来の姿をみることができるはずである。

平成八年に入つてはじまった修理は、まず表面の漆とその下の土の除去をおこなつた。土にみえていたものは焼き土に漆を混ぜた地の粉という固い材質のもので、手間取つたが、九月に入り、あらかたの除去が済んだという連絡をうけた。

あらわれた姿は、予想に反して随分と意外なものであつた。衣のひだにみられる鋭い彫り口は、待ち望んだとおり、平安前期の、しかも大変に優れた仏像であることを証明している。ただ、両手はのちの補作であり、角材にベニヤを巻いた粗略なもので、当初はとなる印相の禅定印を結んでいたらしい。頭部も大幅に改変されていて、当初は宝冠をのせる台があらわされていたことがわかつた。仏像の表面は、古い漆を無理やりこしき落としているため、ところどころ凹凸ができる顔はあはたとなり、白い木の地肌がみえている。

前回の修理は、仏像の腕を切り、身を削り、本来の姿を一変させてしまつた。

以後の修理の方針を決めるために、東木浦地区の方にみていただくことになった。区長さんには事前に現状を報告していたが、一人の老婦人があまりの変貌に驚かれ、わたしたちはきついお叱りをうけた。修理につかわれていた角材やベニヤをおみせして、責任は前回の修理にあることを納得していただいたが、花や香がたえることのない信仰のあり様からは当然のことであり、こころない修理に対する憤りはわたしたちにも強くあつた。



阿弥陀如来像 修理前

結局は、過不足なく、当初にちかい姿にもどすことで地区のご理解を得ることができた。

この仏像の姿は、通常の阿弥陀如来像とはおおきくことなっている。頭部の宝冠台、腹前に両手を重ねる印相（禪定印）、これは、この仏が死後の極楽往生を願う一般的な阿弥陀如来ではなく、僧侶がその姿をおもい描いて修行する、つまり禪定する際の本尊という特殊な仏像であることによる。僧侶の修行が成就すると、阿弥陀如来と一体となつた証しとして宝冠を授かるといわれる。西の方に住む阿弥陀如来と、夕日の光り輝く美しさのイメージをかさねて、全身が紅色ともいう。紅玻璃色（ぐはりじき）の阿弥陀と呼ばれる仏である。修理の仕上げにあたって、失われた手と彩色の復元が問題となつた。参考となる作例は多くはない。手のかたちは当初のものが残る奈良・当麻寺の仏像にならうこととした。単純に両手を重ねているようにみえたが、ちがつていた。中指から小指までは交互に組み、人差し指は背をあわせ、真一文字に結んだ親指から少しだけ上にだしている。最後まで問題となつたのは彩色である。仏像の表面は、前回の修理によってかなりの部分が削られ、全体が白黒のまだらもようになってしまつていて、いたましい。のままにはしておけないが、この種



阿弥陀如来像 修理後

の阿弥陀像で当初の彩色があきらかなものはない。現存の作例はすべてが金箔がはられた金色の仏であるが、当初からそうであったか定かではない、結局は、のこつている下地の黒漆をのこしつつ、その色にあわせて古色づけすることとなつた。

修理が完成したのは、展覧会の図録に掲載する写真撮影の直前であった。一新されたその姿を注意深くみると、わずかだが肩のあたりに、きれいな紅色がのこつている。あるいはこの仏像こそ、全身があかい水晶のような、紅玻璃色の阿弥陀像であつたかも知れない。

（学芸員 竹下正博）



角材とベニヤでつくられていた後補の腕

## 行事案内

7月→9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31		1	2	3
				3	4	5
				6	7	8
				9	10	11
				12	13	14
				15	16	17
				18	19	20
				21	22	23
				24	25	26
				27	28	29
				30		

カレンダー内、□印は休館日

常 設 展			展 覧 会		
館料大入210(150) 大学150(100)※高校生以下は無料、( )内20名以上団体			枠内に明記する以外は無料		
博 物 館		美 術 館			
1号展・2号展・3号展・大展	テーマ展	1号A・B展	2・3号展		
佐賀県の歴史と文化 8/3	有明・玄界魚拓絵巻 8/3	彫刻 8/3	鍋島綾通Ⅱ 8/3	墨がつくる美 の書 — 中林悟竹の 絵が 透け る （常設特別展） 7/20	第27回独立C.S.展7/1(火)~7/6(日)独立CS 3回展 第39回佐賀大学教育学部美術・工芸科総合展 4回展 7/1(火)~7/6(日)佐賀大学文化教育学部 大澤弘一彫刻の世界—屏風7/8(火)~7/13(日)あどべらかあくらぶ 3回展 第14回佐賀県写真協会公募展7/8(火)~7/13(日)佐賀県写真協会 4回展 第22回佐賀県書作家協会展7/15(火)~7/21(月)佐賀県書作家協会 3回展 第63回東光展7/25(金)~8/3(日)佐賀新聞社 2・3・4回展 高校生500(400) 小中生300(200) ※内は料金 大人800(700)
くん蒸のため休館					
8/12 佐賀県の歴史と文化 9/23	8/12 近代・佐賀の 日本画家 9/23	8/12 彫刻 9/23	8/12 鍋島綾通Ⅲ 9/23	8/14 化石が語る 第三紀の佐賀 （常設特別展） 9/15	第18回九州新工芸展8/12(火)~8/17(日)九州新工芸家連盟 4回展 佐賀北高等学校芸術コース創設10周年記念展8/19(火)~8/24(日)佐賀北高等学校 第29回佐賀県勤労者美術展8/27(水)~8/31(日)佐賀県勤労者美術連盟 4回展 第17回社団法人創元会佐賀県支部展9/2(火)~9/7(日)社団法人 第5回曜日の画家たち展9/9(火)~9/15(月)曜日の画家たち 4回展 第14回佐賀県水墨画会展9/17(水)~9/23(火)佐賀県水墨画会 4回展 第47回佐賀県児童生徒理科作品展9/19(金)~9/26(金)佐賀県理科教師連合会 2・3回展
展覧会準備のため休館					

## 日 誌



平成9年度  
博物館実習  
会期  
6月24日  
～7月4日  
(6月29日は休講)  
受講者14名



平成9年度 佐賀県立博物館実技講座  
「親と子の竹細工教室」  
講 師 栗山時雄氏 (竹細工職人)  
会 期 7月22日～7月25日  
受講者 11組(22名)

佐賀県立博物館・美術館報 第118号

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市城内1-15-23 TEL0952・24・3947 FAX0952・25・7006

印 刷 日之出印刷株式会社

平成9年11月28日